

道風を憶う

石井裕

小野道風の真蹟に初めて接したのは、国立博物館の書蹟室であった。道風三十五歳、延長六年十一月内裏の屏風に大江朝綱の詩を書

写することを下命されたときの草稿本一卷、世に屏風土代と呼ばれている巻物であった。屏風土代の印刷本は早くから知っていたが

原本を観て、書の迫力の並々ならぬことに驚き時の経つのを忘れて一筆々筆の動きを心に焼きつけたいと観いたのである。

当時二十歳の半ばを過ぎていた私は、三十三歳を一つの目標として道風に劣らぬ書を書いてみたいと思ったのである。

幸運なことに、更に園城寺から北白川宮に移り、現在屏風土代は国立博物館の藏品となっている智証大師(円珍)諡号勅書の原奉にふれることができた。一年後の書写であるが、

その一年の歳月の隔たりで道風の書の深まりを知り感慨一入であった。

更に広く道風の書を観たいと念願していたが、前田家蔵の常楽寺閑居詩一卷、正木家蔵三体白氏詩巻など眼福を得る機会に恵まれ、大いに勉強することができた。

道風は、寛平六年生、康保三年卒、七十三才で没しているのが妥当とされている。寛平六年は西暦八九四年宇多天皇の御代であり醍醐・朱雀・村上帝の世を生き康保三年西暦九六六年、正四位下内蔵頭で没する迄官位は高くならず能書をもって評価された人と思われる。

当時の人から小野道風は能書の絶妙なりといわれていることから評価の高かったことがわかる。

卒業生・文芸学会だより

利根川 裕先生をお迎えして

平成二年九月十五日(土) あいにくの天候でしたが、多数の先生方、並びに、四十数名の卒業生が、会場の神奈川県立近代文学館に集り、第三回 文芸学会・卒業生の会が開催されました。

この会は、昭和六十三年に発足して以来、卒業生を中心とした年一回の集いとして、多数の方々のご協力により開催され、今年で三回目を迎えました。

今年は、講師として、元文芸科講師で、作家、現在TV等で活躍中の利根川裕先生をお迎えし、「現代の魔術師」と題して講演(写真)していただきました。

普段ブラウン管の中でしか拝見できない先生の真近での迫力満点のご講演は、大変すばらしいものでした。



道風の時代には優れた筆蹟に接する機会も多かったと推測される。それは道風が王羲之の書をよく咀嚼し自分のものとして、ことがうかがえるからで、王羲之の法帖に出てくる文字の形のとり方、筆勢などよく似ているからである。

優れた書を書くには、絶えず名品に接し、目標は高く、広い視野に立ち、深く究めようとする心がなくてはならない。

三十歳になったら道風に劣らぬ書をと念願したが、書とかかわりあって五十年を経た今到底足元にも及ばぬことを恥ずるばかりであるが愚鈍なりに励むより他あるまいと思つてゐる。

今秋、東京国立博物館で、日本美術名品展が催される。案内によると、道風玉泉帖一巻が展観されるという。

これは、冒頭が「玉泉南澗花奇恠」の句で始まるので名づけられた巻物で、白楽天の律詩四首を題とともに四十行にわたって書写し更に二行の自跋を加えている。この律詩は、白氏文集卷六四に取められているもので実に自由な心境で暢びやかに書かれている墨宝である。

自跋には、

以^テ是^ヲ不^レ可^レ為^カ縁^ス非^ニ例^ノ体^ニ耳^ミ

とある。屏風土代などの書きぶりと違うからであらう。

同時に王羲之の名品も展観されるという。

羲之を観、道風を観、近來の眼福を得られるのは幸せであり、道風に一步でも近づけるような書を書けるようになりたいと思つる。

追記

日本美術名品展には東京では久しぶりに正倉院の名品も展観されるという。美術に関心のある方の参観をすすめたいと思つる。

講演会終了後には、昼食をとりながら、懇親会を開き、なつかしい先生方のお話や諸先輩方や後輩の近況等を伺いながら、楽しい秋のひとつきを過ごしました。

この会は、想い出多き学生時代のなつかしい文芸科との唯一のつながりであると共に、会員同士の交流の場でもあります。

なつかしい学生時代に戻れる年に一度のこの機会に是非、会員同士、又、未入会の卒業生の方々へも積極的にお声をかけていただき、一人でも多くの方々にお集りいただきたいと思つます。

この会の更なる発展と存続のため、皆様により一層のご理解とご協力を心よりお願いいたします。

〔昭和六十三年卒業 高実子 由起〕

平成二年九月十五日（土・敬老の日）

午前十一時～午後三時

司会 武田多美恵

委員長挨拶 高実子由起

〔講演〕 「現代の魔術師」

作家 利根川 裕先生

〔懇親会〕 県立近代文学館二階会議室